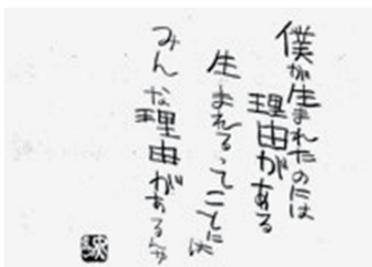


ここで、Aさんの生き方が変わるきっかけになった映画の一部を紹介します。映画“1/4の奇跡”は元養護学校の先生のかっこちゃん（山元加津子さん）が子ども達とのふれあいの中で感じることをメッセージにしている映画です。

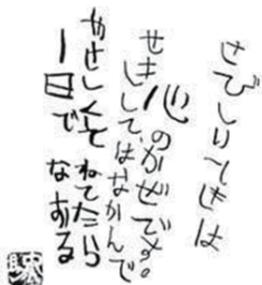
大ちゃん（原田大助さん）は小学校6年の時に、かっこちゃんのいる学校に転校してきました。当初は、かっこちゃんとも目を合わせず、いつも壁の方を見て何かブツブツ言っていました。時間をかけて、かっこちゃんが大ちゃんとお友達になった時、大ちゃんはかっこちゃんに心を開き始めました。そのころ彼は、いつもノートに文字みたいなのを書いていたそうです。それば、小さなくちゅくちゅとした形で、周りの人は、読むことはできませんでした。

ある日、かっこちゃんは大ちゃんのためにワープロを学校に持ってきました。機械が大好きだった大ちゃんは、すぐに使いこなすことができるようになって、文字をうてるようになりました。大ちゃんは、文字というものは、人に想いを伝えることができるという事をわかりました。

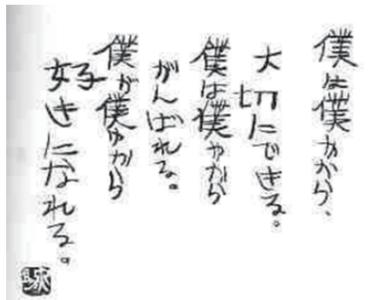
それからは大ちゃんの中で表現したいことを、詩を通じていろいろと語りはじめます。大ちゃんから流れ出てきたのは、心を深く揺さぶる言葉の数々でした。一部を紹介させていただきます。



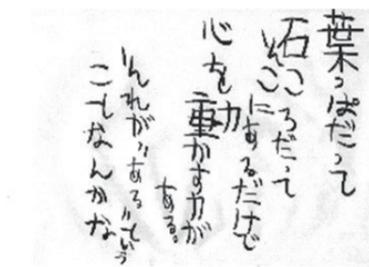
「僕が生まれたのには理由がある
生まれるってことには
みんな理由があるんや」



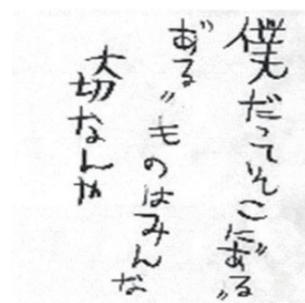
「さびしいときは心のかぜです。
せきして、はなかんで
やさしくして ねてたら 1日でなおる」



「僕は僕やから 大切にできる
僕は僕やからがなばれる
僕が僕やから 好きになれる」



「葉っぱだって 石ころだって
そこにあるだけで
心を動かす力がある
それが“ある”ということなんかな」



「僕だってそこに“ある”
“ある”ものはみんな大切なんや」



「戦車と兵器とピストルと...
いらんもん何でつくるんやろ」

『さびしいときは、心のかぜです』原田大助、山元加津子 共著 樹心社 書籍引用

二人目に、女の子のことを紹介させてください。その子をBさんとします。Bさんが素敵だなんて感じたのは、電車の中でした。

私とBさんと座っていたら、次の駅でおばあさんが乗り込んでこられました。Bさんはおばあさんに気がつくやうに、すぐに自分の席を譲りました。この日は朝から動きっぱなしだったので、Bさんはとても疲れていたはずなのに、そんな自分のことは全く気にしない様子に、私はびっくりして聴いてみました。大丈夫？かなり疲れているよね？って、まわりには、寝たふりをする人もいるのに・・・

すると、Bさんはこんなふうになりました。「目の前のおばあさんにお席をゆずることで、遠く離れて住んでいる大好きな私のおばあちゃんに、誰かがお席を譲ってくれるかもしれないもん。まわりまわって…」

「それと夜寝るときに、やっぱりお席を代った方がよかったって心に残るよりも、ずーっと気持ちがいいもん」と素敵に笑顔でこたえてくれました。

そして、こんなことも話してくれました。「電車の中で前に座った人や、道で通り過ぎた知らない人でも、楽しそうとか、悲

しそうとか、嬉しそうとか、その表情から感じることもあるから、こんな風に席を代わることは、たいしたことじゃない。みんなが気持ちよく生きることにつながるし、自分も人も温かい気持ちになるんだ」と。

Bさんは、まわりの人を、自分の中に感じて生きているんだなあ、と思いました。私たちは、まわりの方の幸せな様子を感じると、自分もさらに幸せになります。人ってそんな生きものだと思っただけで、つい自分のエゴ（損得）が出る時があります。

エゴがわるいわけではなく、この気持ちを感じて、手放せたのなら、もっと楽に、楽しく生きていけるんじゃないかなとBさんから感じました。Bさんの見方は、“周り人を含んだ見方”をしていました。

最後、三人目に紹介したい友達がいます。里見英則くんという、とても素敵な詩をつくる人です。そのお友達は、重度・重複障がいをもっているといいます。私は、正直、障がいという言葉がしっくりきません。何をもつての障がいというのだろうかといつも思っています。

友達は、自分がしたいように動くことはできません。自分の気持ちとは関係なく、勝手に声がでたり、勝手に体が動いたりするので、その様子を見た人たちは、想いや言葉がない人、理解しあえない人、悲しいことに知能が低い人と思われてしまう場合があります。とても悲しいです。

しかし私たちは、彼らが言葉や想いがあることを知っています。いろいろな方法を使って、コミュニケーションをとります。その方法としては、彼らの指を、ふんわりと支えていけば、私の手のひらに文字を書いてくれます。一文字一文字をゆっくりと書いてくれて、お互いにお話ができます。

また、レッツチャットという装置を使っても会話をします。“あかさたな、はまやらわ”と機械が読み上つづげる中から一行を選びながら、一文字づつ綴って、文章をつくり、お話をすることができます。

私たちは、多くの人が使っている方法だけが、コミュニケーションをとるための方法だと思っているかもしれません。話ができることだけがコミュニケーションの方法ではないし、見えていることだけが、その人のそのままの姿でもないかもしれないことを、みなさんに知ってほしいのです。

冒頭にトイレットペーパーの形を聴いてみたように、人はみんな自分の「見方」をもっていて、それを広げたり、違う角度から見たりできます。みんなは必ずしも同じ見方をしているとは限らないですし、みんなが違ってよくて、違うからおもしろい。

また、何か1つの見方が正しいとか正しくないとかではなく、みんなそのままでもいいのだと気づいたなら、心の中にわかまりをもつこともなく、自分も周りの人もさわやかに、かるやかに、いい人生を生きていけると、心から思います。

今の季節だと、風のこちよ冷たさや陽の温かみを感じとれるでしょう。皆さんは幸せを、どんなときに、どのように感じますか？

最後になりましたが、里見英則くんの詩をご紹介します。今年の7月には、『Dreams』という、学習会サロン自作作品集ができます。

みなさんが幸せでありますように、心からお祈りしています。どうもありがとう。

三浦喜美子

『Dreams』学習会サロン自作作品集 より

「ぼくの道」里見英則

ぼくは 楽しいことが大好きだ ぼくの生きる道は なぜかけわしい
だけど ぼくには詩（うた）がある

ぼくたちみんな 心の中に詩（うた）がある
ぼくたちの詩（うた）は 生きるための詩（うた）

けわしく つらい 道だけど 希望のひかり 見えるから
心の中で うたうんだ うたえば つらい道のりも 楽しく 明るく 生きられる

ぼくたちにできること それは 心の中でうたうこと

ぼくの道は 詩（うた）で明るくてられる ぼくの道 これからもきつとつづくさ
心の中に詩（うた）があるから

※ぼくは心の中で詩（し）を作り、それを生きがいに生きてきました。
その事を、詩（うた）にして、ナミさん（友達）の声で聞きたかったので作りました。